

世界ことば紀行7・ヒエログリフ～エジプトの絵文字～ 小林昭美

私はエジプトに行く機会が二度あった。一度目はカイロだけで、二回目はナイル河中流のルクソールまで足を延ばす余裕があった。ルクソールは有名なツタンカーメン王の墓が発掘された場所である。ツタンカーメンの黄金のマスクは、第一回目の時にカイロの考古学博物館で見れていた。その後、C.W.ツエーラムの『神・墓・学者―考古学の物語』で、イギリスの探検家カーターと、その発掘を支援したカーナヴォン郷の物語を読んで感銘を受けていたので、ルクソールを訪れるのは、胸躍るのを抑えがたい気持ちであった。

ルクソールは古代エジプトの都のあった場所で、ナイル河東岸の日が昇る方角にはカルナック神殿やルクソール神殿がある。日が沈む方向のナイル西岸には王家の谷などがあり、ツタンカーメンの墓もここで発見された。ツタンカーメンの墓の周辺は盗掘村ともいわれ、盗掘を生業とした人々が住んでいるといわれる村もあったが、墓はほとんど盗難を受けず、数々の副葬品がほぼ完全な形で出土していた。

ロゼッタ・ストーンとの出会い

古代エジプト文明の遺物はエジプトばかりでなく、イギリスの大英博物館、アメリカのメトロポリタン美術館、ニューヨークのブルックリン・ミュージアム、パリのルーブル美術館などにもたくさんある。そのなかでも重要なのは大英博物館にあるロゼッタ・ストーンである。私はイギリスに行くことがあつたらぜひロゼッタ・ストーンを見てみたいとおもっていた。最初にイギリスに行く機会があつたのは、取材班の一員で、取材も目いっぱいだったので、残念ながら大英博物館に行く余裕はなかった。その後はイギリスに行く機会があると毎回大英博物館を訪れた。

ロゼッタ・ストーンはただの黒い石で、エジプト館の入り口に堂々と据えられていた。ヒエログリフは読めるわけではないが、読めないがためにかえって、文字とは何か、ことばとか何かを考えさせてくれる。ここには何が書かれているのだろうか。古代エジプトではこの文字で恋文をかくことができたのだろうか、などと考えた。

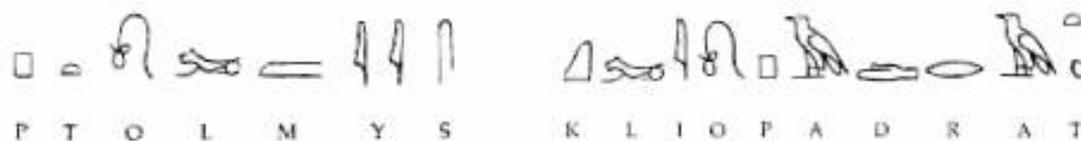
そして、ロゼッタ・ストーンとの出会いを記念して、日本の拓本のような、実物大のファクシミリ版のコピーを買ってしまった。ロゼッタ・ストーンは1779年ナポレオンがエジプト遠征を行った際にアレキサンドリアの近くのロゼッタで発見された。ナポレオンは遠征のたびに何百人もの学者を従えていったという。

ロゼッタ・ストーンは真っ黒な花崗岩の塊で、古代エジプト文字（ヒエログリフ）と民衆文字（デモティック）、それにギリシャ文字の3種類の文字で書かれている。早くから、3種類の文章には同じ内容が書かれているのではないかと推測する学者があつたという。

その後1801年にはイギリス軍がエジプトに上陸してフランス軍を降伏させて、それ以降ロゼッタ・ストーンはイギリスの所有物となり、現在は大英博物館の展示物の眼玉になって

いる。

ことばはおもしろい。絵文字の動物が右を向いていれば右から読み、ライオンやウズラが左を向いていれば左から読む。さらにオベリスクのように縦書きにしてもいい。「クレオパトラ」とかくときは美人の絵を描いても、どの人か特定することができないので、「レオ」の部分はライオンの絵であらわす。



葦織りのマット(p)・ロールパン(t)・投げ縄(o)・ライオン(l)・指(m)・葦の穂二つ(y)・折り畳んだ布(s)、

丘の斜面(k)・ライオン(l)・葦の穂(i)・投げ縄(o)・葦織りのマット(p)・ハゲワシ(a)・手(d)・口(r)・ハゲワシ(a)・ロールパン(t)

プルトルコスによって「絶世の美女」と讃えられた「クレオパトラ」をあらわす文字は、ヒエログリフでは結局「ライオン」だったのである。

ヒエログリフの解読

エジプトでは紀元前 3000 年頃にはヒエログリフが使われていたと考えられている。それが、紀元 4 世紀頃までには読み手がいなくなってしまう。ロゼッタ・ストーンは古代エジプト文明の後期にあたるプトレオマイオス朝(BC305-BC10)に作られたものである。

当時の都はアレキサンドリアである。アレキサンドリアはアレキサンダー大王にちなんだ名前である。アレキサンダー大王は紀元前 332 年に東方遠征を行い、シリア、エジプトさらにはペルシャまでをその版図におさめ、古代ギリシャ文明はこれらの地域にもひろがっていた。アレキサンドリアではアレキサンダー大王の征服以来ヘレニズム文化が栄え、図書館もあった。そして図書館を中心に優れた学者を多数輩出した。ロゼッテ・ストーンにはエジプトの暦で西暦紀元前 196 年という記録が残されている。

ナイル河の下流域は豊潤な土地で、ヒクソス人、アッシリア人、さらにはペルシャ人などが攻め入り、そのたびに住民は多民族化していった。ギリシャとは古くから貿易を通じて長い交流があったほか、ギリシャ語は地中海性世界のリング・フランカ(共通語)になっていた。プトレオマイオスもギリシャ系の為政者の一人であった。ロゼッタ・ストーンが作られた時代には、聖職者はヒエログリフ、為政者の多くはギリシャ語を用い、民衆はコプト語を用いていた。デモティック(民衆文字)は紀元前 650 年頃ヒエログリフを簡略化してコプト語を書くためにもちいられるようになった文字である。

ヒエログリフの解読は 16 世紀にはすでにはじめられていたが、初めて解読に成功したのは 19 世紀のフランス人学者ジャン・フランソワ・シャンポリオンであった。解読には

300年の歳月が必要だったことになる。ギリシャ文字は表音文字であるが、ヒエログリフは象形文字であると考えられていた。シャンポリオンはギリシャ語ばかりでなくコプト語の知識もあったから、ギリシャ語とコプト語が対応する部分を探し出し、それに対するヒエログリフを探すことができた。そして、ヒエログリフには音読する部分と訓読する部分があることが次第にわかってきた。ことばがことばとして成立するためには、「てにをは」など文法的機能をにやうことばも必要であり、形にならない思想や観念もつたえなければならぬのである。

メンフィスの勅令

ロゼッタ・ストーンはプトレオマイオス王朝の時代にメンフィスの宗教会議の布告を二か国語（エジプトの神聖文字と民衆文字、それにギリシャ語）で書かれた石柱の一部で、メンフィスの勅令と呼ばれている。

ナポレオンの軍隊がこれを発見した時には、すでに破損していて、要塞の石垣の一部として使われていたという。

プトレオマイオス朝時代は初期のファラオの時代と違ってヘレニズム化が進んでいたが、エジプト人の心を支えていたのは古代エジプトの神々であった。プトレオマイオス王もファラオの時代の王のように、エジプトの神々を尊崇することによってのみ、その正統性をみんしゅうから認められていた。

メンフィスの勅令のプトレオマイオス5世を讃えるものである。三つの言語で書かれているが、その内容は直訳ではなく、言語によってかなり意識もある。大英博物館のロゼッタ・ストーンのファクシミリ拓本についている英訳でその一部を比べてみると次のようになる。

（ヒエログリフ）

エジプトの庇護者プトレミイは毎日、神々に三回祈りを捧げ、供え物をし、慣例に従って儀式を行いなさい。

（デモティック）

エジプトの庇護者プトレミイはエジプトを守り、町の守り、神に勝利の刀を捧げる。そしてエジプトの神々のいる寺院に祈りを捧げなさい。

（ギリシャ語）

エジプトの守護者プトレミイ。エジプトの神々の像を建て、武器を奉納し、戦勝を祈願しなさい。

王は現世でもエジプトの神々に支配されているのである。ロゼッタ・ストーンは三つの言語で書かれているとはいえ、どれかの言語を原本にして直訳したものではなかったのである。このことからヒエログリフの解約がいかに困難だったか、その一端がわかる。

ことばが違うと表現も変わる。英語で話しているときは“I love you.”といえる人でも、日

本語で会話しているときは「愛しているよ」というのにはなかなか勇気がいるのではなからうか。バイリンガルになればなるほど、言語による慣用語の使い方が変わってくる。

シンガポールの元首相リー・クアンユーは『李光耀回忆录』という回顧録を出している。日本語版は日経新聞で「私の履歴書」として紹介されが、英語版は“The Singapore Story”となっている。シンガポール建国の父のたどった道はまさにシンガポールの歴史そのものでもある。また、日本語版がでる前に英語版で読んだのだが、中国語版を覗いてみると、中国語版は本土の人にもよんでもらえるように一部簡体字もつかわれている。内容も中国系の人々が共感するであろう祖父母などの写真も挿入されていて、直訳ではないことがわかった。バイリンガルというのは必然的に逐語訳ではなく、その言語にふさわしい表現になるものようである。

「命短し、恋せよ乙女」というのは“Ars longa, vita brevis”というラテン語の翻訳であり、名訳だと言われている。英語でいえば“The art is long, a life is short.”で直訳すれば「芸術は長く、人生は短い」ということになる。これは、ギリシャの医学者ヒポクリテスの箴言のラテン語で、原義は「(医療の)技術の習得には時間がかかる。時間は無駄にしてはいけない。」という意味だという。ラテン語の *ars* というのは技術というニュアンスが強いが、英語の *art* は芸術である。決して誤訳ではないが、翻訳すると意味が違ってしまふ。

ラテン語では英語の *is* にあたる *est* は省略されている。ラテン語の文法は複雑で *ars* (単数、主格) *longa* (第1, 第2変化の形容詞)、*vita* (女性形、単数、主格) *brevis* (第3変化の形容詞、女性形、単数、主格) で *vita* と *brevis* は性、数、格が一致する。これを中国語に訳すと「芸術永遠、人生短命」とでもなるであろうか。ラテン語と中国語は語順は同じだが、中国語には性、数、格の表示はない。

翻訳には逐語訳、直訳、意訳、超訳などがある。人気作家シドニー・シェルダンの作品などは超訳と呼ばれることもある。バイリンガルによる翻訳には、逐語訳、直訳はなく、意訳あるいは超訳になるのは自然の流れなのである。

日本では漢文の読み下し文以来、外国語は直訳してきた。

江碧鳥逾白	江(こう)は碧(みどり)にして鳥は逾(いよいよ)よ白く
山青花欲然	山は青くして花は然(もえ)んと欲す

國破山河在	国破れて山河あり
城春草木深	城は春にして草木深し

このように直訳できるのは、日本語が漢字文化圏のなかで、中国語と語彙を共有してきたからである。英語となるとそうはいかない。ジョン万次郎は“Good morning”を「よき朝でござる」と訳した。これは英語の原義は伝えるが、日本語の慣用は「お早うございます」である。ことばの意味はその言葉の使われ方によって生まれる、という言語学者もいる。英語では Good morning は昼までで、午後は Good afternoon になる。しかし、日本語では「おはよう」は9時頃までで、あとは「こんにちは」になり、それが夕方まで続く。英語では兄

弟は brother ですむが、日本語では兄か弟か確かめなければならない。

イスラム教国ではラマダン（断食）の月には日の出から日没まで食事をとらない。ラマダンの間はベリーダンスも禁じられている。昼と夜の境目は誰が決めるのか。白い糸と黒い糸を掲げて、その違いが分かる間は昼、違いが分からなくなったらラマダン明けだそうである。ラマダンが明けると、人々は昼間の分までむさぼる。ことばは外国語と一対一で対応していない場合が多い。

わが国の時刻制度でも、子、丑、寅、卯、辰、巳、午、未、申、酉、戌、亥、などの時刻が決められていたが、定点は子（夜中の0時）、午（正午）だけで、あとは季節によって変わる。例えば、日の出は「卯」だが、冬至には現在の7時頃、春分・秋分には6時、夏至には5時ころとなる。日没は「酉」で、冬至には5時、春分、秋分には6時、夏至には7時になる。その間は均等に割り当てられるので、当然現在の時刻とは異なる。

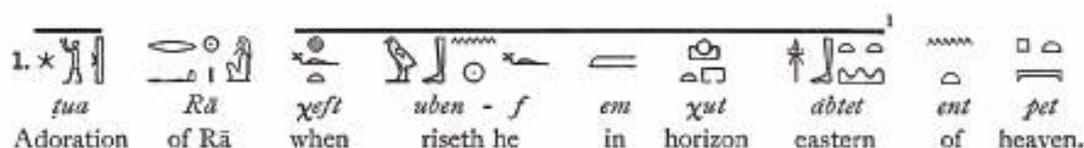
エジプト死者の書

私には次第に、定年になったらエジプトの絵文字（ヒエログリフ）を読めるようになってみたいと思うようになった。その後、ヨーロッパへ行くたびにパリのルーブル美術館で本格的なヒエログリフの文法書、辞書、『死者の書』などを買い求めてヒエログリフに挑戦した。ヒエログリフの解読に300年の歳月を要したのは、それなりの理由がありそうである。ヒエログリフは象形文字と一般にいわれているが「プトレオマイオス」や「クレオパトラ」のように簡単に解読できるものは少ない。

古代エジプト語の「水」はA型を連ねて表すが発音 n が所有格の「の」と同じなので、助詞に転用されることもある。太陽は☉で *weben* と読む。しかし、これも太陽を表すばかりでなく、冠詞の役割を担うこともある。言葉には文法があるので、象形文字だけでは表せないのである。

同じ鳥でもフクロウ(m)、ウズラの雛子(w)、ハゲワシ(a)、ホルスの鷹(hr)、ホロホロ鳥(nh)、トキ(ah)、ツバメ(wr)、ガチョウ(sat)、飛ぶカモ(pa)、アヒルの雛(tja)などが書き分けられていて、それぞれの文字は他の文字と組み合わせることによって単語（さまざまな意味を持つ単位）を構成する。ちょうど漢字が偏と旁の組み合わせによって4万字にもなるようなものである。

E. A. Wallis Budge の”The Egyptian Book of the Dead”（『エジプト死者の書』）はヒエログリフとその読み方が並べてかいてあり、その上にその意味が英語で書かれている親切な本だが、これを読めるようになるには、漢字を知らない人が新たに漢字を覚えるのと同じくらいむずかしそうである。



これを独力で解読するのは至難の業である。「太陽神ラーに栄あれ。ラーはまさに東の空の地平線から昇らんとしている。」とでも訳すことができるであろうか。ラーはエジプトの太陽神である。エジプトは多神教で、さまざまな神が登場する。フンコロガシ（スカラベ）もしばしば登場する。フンコロガシはエジプトでは太陽の運行を司る神ケペラと結びつけて考えられている。フンコロガシが動物の糞をまるめてころがすように、太陽はフンコロガシによってころがして天空を移動し、地上に昼と夜とを作っているのだと考えられていたようである。

墓場の碑文にはこのような文字が延々と書き連ねられている。エジプト人は現世でも神とともに生き、死者も魂が生き延びて、何不自由なく暮らせることを願っていたのである。

多神教のエジプトにはさまざまな神がいる。

Nu：すべての神々の祖。

Nut：女神。

Ptah：正義と権力を司る神。

Khnemu：地球、空気、海、空を作った創造神。

Khepera：太陽の運行を司る神。すべてを蘇らせる神。

Tum：夜の神。

Ra：太陽神。

Isis：Osirisの妻、Horusの母、

Horus：OsirisとIsisの息子。『死者の書』には父を殺して王位を篡奪した、とある。

注釈書の助けを借りても『死者の書』を理解し、ヒログリフの使われ方を知るのはむずかしい。私はかなり努力したつもりだったが挫折した。挫折したもうひとつの理由は、言い訳になるが、ヒエログリフに書かれているエジプト人の世界観に共鳴できなかったことにもよる。古代エジプト人は現世においても神々とともに生き、来世においても神々にまもられ、現世の栄華が続くことを願っている。『死者の書』に書かれていることは、人間の富貴への願望を丸呑みしているようであった。「わが王様は死後の世界においても美女にかこまれ、山海の珍味に恵まれますように」というようなことばかりである。これは私の人生観と違う。私はできることなら良寛さんのような老後を送りたいと考えていた。私の老後の大志は砕かれてしまった。

ことばと文字

世界には5000とも7000ともいわれる数の言語がある。国の数よりはるかに多い。人類はコミュニケーションの手段として言葉を使う。どんなに未開といわれる種族でも言葉を使わない人々はいない。

ちょうど赤ちゃんが生まれたときには歯がないが、やがて必ず歯が生えてくるように、言葉話す能力も生まれる前から赤ちゃんのなかに埋め込まれた生得の能力である。

しかし、文字は生得のものではなく、人間の作ったものである。ローマ字は古代ギリシャ

人がフェニキア文字を元にして作ったものだという。その後、ローマ字はヨーロッパ中で使われるようになった。文字は言語の数だけあるわけではない。文字をつくった民族は限られていて、ほとんどの文字は借用であり、その改良型である。

パキスタンの主な言語であるウルドゥ語はヒンズー語系のことばであるが、パキスタンは回教国であるためアラビア文字が用いられている。

中国、朝鮮半島、日本、ベトナムなどは漢字文化圏である。漢字を借用して自国の言語を書きあらわしていた。日本は平安時代に漢字を元にした文字である仮名を発明して自国のことばを書けるようになった。朝鮮半島では李朝時代にハングルを採用した。ベトナムでは戦後漢字を捨ててアルファベット表記に変えた。

漢字は中国語を表記するために発明された文字だから、外国語を書くのには不便も多い。日本語でも「峠」とか「榊」とかいわゆる国字も加えられた。ベトナムでは字喃(チュノム)という、中国語の音とベトナム語の訓を組み合わせたような文字を作ったことがあるが、あまり普及しなかった。中国でも敦煌などの奥地では中国語と違うことばが使われていたので、西夏文字などが作られた。漢字は偏と旁からできているが、西夏文字は三層になっている。井上靖の『敦煌』を映画化したとき、敦煌の郊外でロケが行われた。その記念館が敦煌の近くにあり、そこには今でもロケに用いられた西夏文字の幟が展示されている。

表意文字(象形文字)は世の中の物の数だけ文字が必要になるから中国の『康熙字典』は4万語を越える文字を収録しているという。これに対して音素文字であるアルファベットは基本は26文字ですむ。音節文字の場合はその中間で、日本語の五十音図は約50、ハングルは子音が19、母音が21、それに終音6(パッチム・-p,-t,-k,-n,-m,-ng)の組み合わせが基本となるから、論理的には2394の音節を表示できることになる。

音節の構造は言語ごとに異なるから、漢字のような音節文字で外国語を表記するには困難が伴う。例えば、英語の場合複合子音があり、spring、street、strong、straightなどは一音節であり、schol-ar、sprink-ler、strang-er、stretch-erなどは二音節である。これを音節文字である日本語のカナで書きあらわそうと思えば、「スプリング」「ストリート」「ストレンジャー」「ストレッチャー」などになってしまう。日本人の英語がなかなか通じないのはこのためかもしれない。英語は26文字のアルファベットで表記できるが、これを音節文字で表記しようとするれば、2000とか3000の文字が必要だという。

中国では言葉を学ぶということは文字を学ぶことであった。日本でも「ことばは音声であり、文字はその写しである」という考え方はなかなか受け入れられない。しかし、文字はことば(音声)の不完全なうつしでしかない。アラビア文字では子音だけが示され、母音は書かれていないから、それを補って読む必要がある。中国語には四声があるが、それは漢字には示されていない。ベトナム語が漢字からローマ字表記に切り替えたとき、声調を示そうとしてアルファベットに記号を付け加えたので、タイプなどで打つには随分複雑になってしまった。人類は耳で聞こえる「ことば」を目でみえる「ことば」にするために苦闘を重ねてきたのである。

次回は英語